

近代産業地域社会における「生活」と「労働」の再編過程

—Women's Educational and Industrial Union, Boston による再編主体の日米比較—

湯澤規子

近代において、産業勃興、労働者の誕生、急激な人口流入は新たな産業地域社会を形成した。そして「労働」と「生活」は、従来とは異なる論理と体系の中で再編された。本報告の目的は、この再編過程に着目し、「労働」と「生活」が誰によってどのように把握され、いかなる論理と体系の中に位置づけられるようになったのかを明らかにすることである。研究対象は産業革命期における日本とアメリカとする。

主に、労働者の「労働」と「生活」が誰に組織化され、どのように「労働力」の再生産がなされたのかを考察する。具体的には3つの史料を分析する。それはすなわち①『工場統計』、織物工場史料、各府県の社会局調査資料、②アメリカ合衆国マサチューセッツ州ローウェルの織物工場史料、同ボストン：Women's Educational and Industrial Union, Boston（以下WEIU）史料、③The National Woman's Trade Union League（1903 設立）全国女性労働組合連盟の機関誌 *Life and Labor* である。

まず第Ⅱ章で近代日本における産業地域形成を概観し、その地域的特徴を明らかにする。ここでは特に東京府深川区を事例として男性労働者と女性労働者の生活世界を復原する。第Ⅲ章では、近代日本において「生活」と「労働」の再編過程が男性と女性の間で異なる要因を、女性労働者の歴史的変化をふまえて考察する。

第Ⅳ章、第Ⅴ章では 18～19 世紀のアメリカ合衆国マサチューセッツ州の織物業地域に焦点を当てる。まず、工場で働く日本の女性労働者の事例と比較し得る事例として、Lowell の織物工場で働く女性たちの生活世界を分析する（第Ⅳ章）。次に、労働者として移民が増加する 19 世紀中期以降の労働市場の変化と地域社会の変化を、女性労働運動との関わりから論じる（第Ⅴ章）。

日本とアメリカの事例をふまえて、第Ⅵ章では労働者の「生活」と「労働」を再編する主体の違いを明らかにする。そしてその背景について考察する。最後に、以上をふまえて、「生きること」を政治経済史として論じることの意義と展望を提示した。

高度成長期の「労働力の再生産と家族の関係」をいかに分析するか

—大企業社内報を主な史料にして—

大門正克

労働力の再生産と生活の接点を検討するために、「高度成長期における企業社会（社員）と近代家族（主婦）の関係」の動的的分析を行うことを課題にする。この課題検討の

ために、ここでは、日本通運の社内報『日通だより』と日本通運の労働組合の機関紙『日通労働』を用いる。『日通だより』には、企業の求める社員像・主婦像が説かれている。ここで主婦は、夫の安全・健康・衛生に配慮し、会社の事業を理解し、子どもの教育、家族の健康・衛生、生活技術などに留意して家庭生活を管理することが求められている。『日通だより』に掲載された主婦の投稿には、仕事で疲れて機嫌の悪い夫と、夫の機嫌をとることに神経を注ぐ妻が描かれている。非対称的な夫婦像は、労働組合の機関紙『日通労働』にも共通して登場する。高度成長期の大企業における労働力の再生産にとって、主婦規範と妻の生活実践が大きな役割を極めており、現在の日本社会には、この役割が依然として大きく残っている。

三月革命前夜におけるドイツ古典派経済学の特質

—C. W. C. v. シューツにおけるスミスの・リスト的・歴史学派的要素の結合—

柳澤 治

19世紀前半のドイツ社会経済史は工業化と政治的・経済的分野における自由主義の発展をもって特徴づけられる。アダム・スミスの経済理論と一体となった経済的自由主義の思想は、ドイツの経済学者によって受容され、この国の現実の問題に適用された。彼らの多くは封建的な秩序からの農民の解放とギルド的独占の下にある伝統的な手工業制度の改革を主張した。M. E. Vopeliusは、その研究”Die altliberalen Ökonomen und die Reformzeit”(1968)において、アダム・スミスの経済学によって影響されたドイツの経済学者、すなわちドイツ古典派の経済学者が経済理論のみでなく、自国の現実的な問題に注目し、ドイツの工業的発展を阻害する伝統的な障害の除去を主張していたことを明らかにした。本稿はVopeliusのこのサーベイを踏まえて、Caarl Wolfgang Christoph v. Schüz(1811-1875年)に焦点を合わせて、三月革命(1848-49年)の前夜におけるドイツ古典派の社会的経済的思想とそれを支える理論的な枠組みとについて分析することを目的としている。シューツはテュービンゲン大学において教授として国民経済学(Nationalökonomie)を教え、1843年には“Grundsätze der National-Oekonomie”を公けにし、さらに自身の大学の雑誌である”Zeitschrift für die gesammte Staatswissenschaft”に注目すべき論文を掲載している。本稿はまずイギリス古典学派の影響を受けたシューツの理論的な考察、すなわち財の生産の意義、生産における労働の役割の重要性、市場における商品取引、生産のコストに基づく生産物の価格について検討する。この学派の他の経済学者と同じようにシューツはその理論的枠組みを経済的自由主義の原理に結びつけ、これを一国の生産的発展の重要な条件と考えた。本稿は次に産業の自由(“Gewerbefreiheit”)に関する彼の見解と当時のドイツの農業と手工業における伝統的障害に関する彼の分析とを考察し、封建制からの農民の解放とギルド制の改革のためのシューツの主張を明らかにする。彼の「国民経済学」において

は経済理論と現実問題との分析は分離されず、相互に関連し合っていたのである。シューツは同時代ドイツの他の学者と同様に、無制限な工業化がもたらす弊害について見逃すことはなかった。本論文は最後にレッセ・フェールの自由主義のマイナス面に対する彼の批判に注目し、アダム・スミスの理論を批判したフリードリッヒ・リストが主張した保護主義の受容、経済学の方法論として「国民経済学」の体系の中に政治的倫理的要素を含めることを求める主張について解明する。このことにより彼は革命後に発展するドイツ歴史学派の先駆者となるのである。